

[エッセイ]

私たちのドイツ体験

1. 星野 仁美：Gänselieselのいる街で

2001年8月、初めてゲッティンゲン大学サマーコースに参加した。それまでドイツ語を勉強していたにもかかわらず、全ての手続きを英語でする始末。単語の羅列でしかドイツ語を話せない悔しさと、それでも理解してくれようとする友達との交流からドイツ語で会話することの楽しさを存分に味わえた1ヶ月間であった。またそれは、もう1度ドイツで勉強したいというモチベーションへと私を導いたのである。

2度目のサマーコースの参加は、留学中の2003年であった。前回に比べ少しはドイツ語も上達し、語学コースだけではなく遠足やリクリエーション活動を楽しむ余裕が出てきた。サマーコースには、参加者をサポートしてくれる学生がいる。そのチューターを中心にスポーツ、料理、各国の文化を紹介するLänderabendなどのリクリエーション活動が行われていた。もちろん前回のサマーコースでも同じようなことが行われていたのであるが、ドイツ語が話せなくておどおどしている2年前の私にとってはそれを楽しむ余裕など全くなかったのである。しかし、たとえ積極的であっても当時のドイツ語力で楽しむことができたのであろうかという疑問がふと頭をよぎった。

1年間の留学もそろそろ終わりを迎えようとしていた冬、当時習っていたドイツ語の先生から「来年のチューターをやってみないか？」というとんでもないお誘いを受けた。なぜ私に白羽の矢が立ったのかはわからないが、それはまさに青天の霹靂であった。大学のゼミでドイツ語がわからなくて泣き言ばかり言ってる人間に務まる仕事とは思えない、まして帰国直前の私は適任ではないと思っていたのである。一方、こんなチャンスはもう2度と手にすることができないのではと思い、半年後再びゲッティンゲンに戻ってくることを決意したのである。

ドイツ語もまだまだ流暢とは言えない私に、一体チューターとして何

ができるのであろうか。ドイツ語力に不安を隠せない。友達同士の会話には慣れつつあっても、仕事の指示の理解や参加者への説明となると話は別である。いや逆に、2度のサマーコースを体験したからこそ、参加者としての気持ちを一番理解しているのではないか。そんな気持ちが交錯していた。そして、初めて担当するグループは、初級の学習者でも気軽に楽しく参加してもらえるものにしようと心に決めたのである。

そこで生まれたのが、私の担当することになったTheatergruppe（劇のグループ）であった。他のグループは、学習者のレベルに関係なく参加できるものであったが、このグループはGrundstufeの参加者に限った。ドイツ語がわからなくて、リクリエーションに参加できなかった私が、チューターとして貢献できるのは同じ思いをしている参加者に少しでもそういう不安を取り除いて、楽しくサマーコースに参加してもらえなことだと思ったのである。

いざ取り組んでみると、演劇の知識も外国語教育学の知識もない当時の私は何から手をつけたらいいものか皆目見当がつかない。そもそも、初めての取り組みなので前回までの活動を参考にするわけにいかず、手探りの状態でTheatergruppeが始まったのである。そんな頼りないチューターの私を助けてくれたのは当時の参加者と一緒に仕事をしたチューターたちである。ドイツ語で演じる「ももたろう」。参加者を中心にドイツ語の脚本作り、そして小道具作り。たった4回の準備期間とは思えないほどのすばらしい舞台を彼らはAbschiedsparty（お別れパーティー）で演じてくれたのである。こうした満ち足りた気分の中、初めてのチューターとしての夏は幕が下ろされた。

2年後の2006年の夏、再びTheatergruppeをチューターとして担当することになった。一緒にTheatergruppeを担当するチューターは演劇の経験がない。今度こそは私がしっかりしなくてはというプレッシャーを感じながらの仕事だった。参加人数が初めから把握できないので、後で修正が利くように、演じるお話は登場人物が少ないものがいいだろう。影絵なら人前で演じる恥ずかしさを減らすことができるのではなかろうか。そんなことを思いながらサマーコースの幕が開いた。そして参加者と相談しながら決めた、「かぐや姫」と「Froschkönig（かえるの王様）」。普段のクラスの宿題があるにもかかわらず、参加者達が脚本や影絵の準備

を一生懸命してくれたおかげで、夏の終わりには素敵な影絵を見ることができた。

今までのチューター体験の影響を受けて、私自身の外国語教育学に対する考え方も変化していった。外国語で、相手の知っている語彙を用いてわかりやすく説明することは頭で考えている以上に難しいことである。つまり、「知っているだけ」では「わかりやすく」伝えることはできないのである。そして、ただ「楽しい」だけではなく、楽しさの中に「学習」を取り入れることの難しさも改めて感じた。この経験が教師として教える立場になったとき活かされればと思う。

私がチューターをした年の参加者の中には、ドイツ語の勉強をさらに続ける人が多く、中にはドイツに留学してドイツの大学で勉強した人、そして現在ドイツで勉強中の人もある。このゲッティンゲンでのサマーコースが、そういう人たちのモチベーションになったのではと思うと嬉しい。

2. 中坊亜紀子：スイス・チューリヒ大学での一年間

スイス・チューリヒ大学に一年間留学させていただきました。ドイツ語の上達はもちろん、スイスドイツ語の習得をも目指し、また異文化の中でどのようにうまく自分と折り合いをつけて、その中で生活していくかを学びました。

留学中は、ドイツ学科（Germanistik）で言語学を専攻し、授業をいくつか受けました。日常会話ができる程度のドイツ語では、大学の授業には全く通用しない現実に愕然としました。また、自身のやる気と実力が釣り合わず、もどかしい思いでいっぱいでした。あらゆる方法で授業についていこうと努力しましたが、いくら先生の優しい心遣いで予習材料が手に入っても、日本で学ぶことのない専門用語が飛び交う高いレベルの授業についていくことができませんでした。しかし、それも冬学期が終わるころには、与えられたテーマをドイツ語で発表できるくらいまでに進歩することができました。

私は、グループ発表とディスカッションが一つになった形式の授業を

毎週一時間受講していました。2・3人で構成されているグループが毎週一組発表します。45分×2を全て一つのグループが担当します。その間、先生もその授業を受けている一学生のように参加しています。学生が完璧に主導権を握っている授業に驚きました。発表に関して最も大きな違いを感じたのは、発表者がクラスに配るレジュメです。私は今までレジュメを、B4一枚に見やすく簡潔に、発表の内容が分かりやすいように作り、またそれとは別に、発表の読み原稿を作っていました。そのように指導されてきましたし、それが普通だと思っていたのですが、スイスでは、どのグループのレジュメもA4紙裏表7・8枚にぎっしり内容がまとめられたものでした。初め、私は読み原稿を配っているのかと思っていたのですが、発表者はそのレジュメを見ることなく発表を行います。そんな中、私も発表をしました。初めてのときは、何度も何度も読み原稿を暗記するくらいプレゼンの練習をしましたが、一年間でそれにも慣れるようになりました。

留学中に一番悩んだことは、自分の意見を相手に伝えるということです。それと同時に、欧米において、自分の意見を持つ大切さ、またその意見をしっかりと他人に伝えることの重要性を学びました。留学当初は、語学力に自信がない上に、自分の意見がその場にふさわしいかがわからないという不安から、どうしても自分の意見を言う勇気が出せずに、言わずじまいになっていました。しかし、意見交換の場で、そのようにしていると、次第に、その場に存在しないものというような扱われ方をされることに気がつきました。それに気がついたとき、日本語でためらわずに意見が言えていたのに、言語が変わっただけで、その状況を変えることができない自分をもどかしく感じました。一年間で完全克服は達成できませんでしたが、それを受け入れて、改善しようと意識を変える努力はしてきました。

スイスで話されているドイツ語の方言、スイスドイツ語とは、ドイツ人でも理解しにくい方言で、標準ドイツ語にしか慣れ親しんでいない私のような外国人には大変習得の難しい言語です。しかし、こちらで生活するうえでこの言語を理解できるようになるということは、スイスに住む外国人（留学生を含む）にとって重要なことです。また、自身スイスに来て、全くその国の人々の話す言葉が分からないまま帰国することに

抵抗があったので、ドイツ語コースでスイスドイツ語をテーマに取り扱っている授業を半年間受講しました。受講の甲斐あって、一年間でスイスドイツ語を聞き取り、また話すことが少しできるようになりました。いずれは、ドイツ語、スイスドイツ語共に使えるようになりたいと思っています。

最後に、留学して3ヵ月あたりから強く感じていたことがあります。それは、チューリヒの大学生は、本当の意味での大学で勉強するということを知っているということ、本当の意味での大学生であるということです。どんな学生でも、常に大量に出される課題をきっちりこなし、授業に備えています。日本の大学でどれだけの学生がそれを行っているのでしょうか？ 私自身恥ずかしながら、日本にいるときは、家で予習復習などすることはほとんどありませんでした。もちろん、日本の大学の授業で出される課題の量を比較すると雲泥の差です。スイスでは課題に教科書50ページ読むというのが当たり前です。それをきちんとやってくる学生の中で、対等に渡り合おうと思うと、当然ではありますが、自分もそれだけの努力をしなければならないということです。もちろん、留学生には言語のハンデがあります。しかし、だからといって留学生だけ特別ということは一切ありません。チューリヒ大学に留学したからには、その学生と対等に扱われるわけです。そんなシビアな環境の中で一年間学んだこと、努力したこと、感じたことを忘れずに今後の糧にしていきたいと思います。

3. 高谷 桃子：私のドイツ体験記

さして勉強が好きなのでもないのに、奨学金などを貰って留学したバチであろうか。一年間の交換派遣から帰ってきてこの方、やれ留学説明会での一言やら交流会やら、ぐうたら者の私には辛い行事が多かった。そして今回はよりによって「私のドイツ体験記」の執筆である。己が他者に語るほど稀有で立派な体験をしてきたとは到底思えない上に、「ゲルマンミンゾクノダイドウ」がいつ起ったのかも知らないほどのドイツ音痴の私が『独逸文学』というマトモな機関誌に載せるようなも

のが書けるか甚だ不安ではあるが、女に二言はない。書くといったからには書かねばなるまい。

と、自分を奮い立たせ机に向かい、ぐちゃぐちゃにあれこれ突っ込まれた頭の中の引き出しを端から順番に開けていく。「飲み屋での会話」、「気ままなひとり旅の思い出」、「教授から手渡された成績」、片っ端から出していくうち、ふと奥の方に「初めてのゲッティンゲン」を見つけた。嗚呼そうだ、こいつがなければドイツに留学しようとは思わなかっただろう。懐かしさに一杯になりながら私はゆっくりとそれを取り出し、そろそろと埃を払った。

私が初めてドイツに行ったのは大学一年の夏、関西大学が実施しているゲッティンゲンの夏期語学セミナーに参加したときである。もともと私は指定校推薦入学だったにもかかわらず、高校で習った第二外国語はフランス語で、大学に来たのは司書免許を取りたかったからという、特にドイツ学に興味を持った学生ではなかった。語学セミナーに参加した理由も、これから4年間も付き合うことになるドイツってやつをいっぺん見とこうか、という安易なものだった。そんな物見遊山気分を訪れたドイツははっきりいってなんの感慨もなかった。毎週日曜日に近郊の「有名な城」や「乗ったことのないドイツ車の工場」などに連れて行ってもらったのだが、数々の観光名所も勉強不足の私にとっては「なんとなく凄い（らしい）モノ」というだけで、さして面白いものではなかった。そんな私が帰国後ドイツ留学を目指した理由、それは言葉というものに対するある種の感動であった。

私はそれまで言葉がコミュニケーション・ツールであると感じたことなど一度もなかった。日本語はあまりに当たり前すぎて、「使う」という意識などなかったし、英語は「勉強するもの」であって「道具」ではなかった。中学、高校6年間の授業の中で会話練習というものは何回かあったものの、それは単に先生の言ったフレーズを繰り返してただけで、本当に会話していたわけではない。第一“Do you like music?” – “Yes, I do.”などと、すでに趣味思考まで熟知している友人と尋ねあったところで何の意味があるのか。大抵は白けて適当に2、3回繰り返して終わり、というものだった。しかしゲッティンゲンで、私は初めて外国語を「使った」のである。それはパン屋でクロワッサンを買うときだったり、

駅員にトイレを尋ねるときだったり、そしてなにより友達としゃべるときだった。しゃべるといってもたかだか3ヶ月日本でドイツ語をかじった程度のこと、ほとんど何もわからず辞書を指して言いたいことを理解してもらうのが精一杯だった。しかしそれは決まったフレーズを無意味に繰り返す行為ではなくて、相手のことを知りたい、思っていることを伝えたいというホンモノの会話だった。

それから私はドイツ語を真面目に勉強した。もしもっと自由にドイツ語が使えたらきつとずっとたくさん話ができるに違いない、という興奮が冷めなかったからである。それはちょうど見習いの板前が自分の包丁をせっせと研ぐのに似ていた。料理人にとって最終的に大切なのはもちろん料理の腕だ。しかしいい加減な道具は役に立たない。スーパーで買ったサンキュッパの包丁では鯛はおろせない。もっと鋭く、もっと手に馴染むように、私はドイツへの留学を決めたのだった。

この春私は関西大学を卒業し、ドイツ学とは全く別の道を進む。初期新高ドイツ語もルターも関係ない場所で、私に残っているのは刃の粗い包丁一本だけだ。しかし、4年前ドイツで知った言葉の無限の可能性を、私は決して忘れないだろう。そしてその感動は、私が大学で見つけた最も大きな財産である。